

夫人と小野とが、かう云つたのは殆ど同時だつた。そしてその見立は、微苦笑を以て承認された形になつた。

「ところで君の役は誰だい。」

小野も面白づくで黒田に言つた。

「俺か。云ふまでもなく木村重成さ。」

「役過ぎるわ。」夫人が辛辣に云つた。「黒田さんは、あの裏に隠れてゐて片桐の誠忠を立聞いてゐながら、感心して目玉をくり抜く間者よ。氣の早いところが似てゐるわ。」

「いや、そんなことありませんよ。僕ほどの立役者に、そんな役を振つちやア、芝居になりやしない。」

「僕も三成は柄にない。」小野も云ひ出した。「三成は一つ杉浦に廻して小姓銀之丞を買つて出るよ。」

「ふん。」黒田はちらと冬子嬢の方を見やりながらわざと蔑すむやうに小野に云つた。「役處は合つてゐるが、さぞ可愛くない銀之丞だらうな。」

「冬子さんは蜻蛉で納まりますか。」

杉浦も、親愛と皮肉との例の混合で、かう言ひ出した。

「知らないわ。」

そんなことで、皆は笑語の中に食事も終つた。……歸りも、小野は夫人と冬子嬢とを、家までまた送り届けることになつた。と、途中で、冬子嬢は今日見た芝居に關する話から、こんな感想を云ひ出した。

「……可哀さうね。あの腰元の蜻蛉つていふ女。私、あの銀之丞つていふのが、憎らしくなつちやつたわ。馬鹿の癖に、あんなに附けまとふんですもの。」

「何ですつて。」小野は冗談半分に、併し半ば眞面目で、彼女の顔を見返しながらかう云つた。「反對ぢやありませんか。あの銀之丞の方が、よつほど可哀さうですよ。」

「それやア貴方はさうかも知れませんが……。」

かう云つて彼女は、後を濁したまゝ少しくすりと笑つた。

「さうですよ。ほんとにさうですよ。」

小野も微笑を以て、さう斷定するやうに繰り返したが、何だか鳥渡冗談でないやうな思ひがした……。

兎もあれ、併しさうした状態は、引くるめて小野には樂しいに違ひなかつた。共同の敵、さうした思ひに對して、彼らの盟はだん／＼固くなり行く傾向だつた。が、併しその頃、また突然妙な第二の故障が、彼らの前に現はれた。

第十一章

かうして、先輩たちの放つた第一の反對の矢は、まづ刎ね返された結果になりつゝあつた。けれど、その時突如として、第二の矢は、何處からともなく飛び來つた。眞に何處からともなく、流れ矢のやうに不意に飛び來つたのであつた。

それはまた、一通の無名の怪しい手紙だつた。

或日、小野は下宿の一室に、ぼんやり屈託しながら、丁度大學生ラスコルニコフのやうに、いろいろ『考へ事』をしてゐた。彼はその時分は、森川町裏の下宿から、杉浦のゐた臺町の、猫のやうな婆さんが經營してゐる、素人下宿の二階へ移つてゐた。その下宿は、親切で且つ氣樂だつた。婆さんの氣心もよく知れてゐた。そこで小野は、杉浦が川瀬家へ家庭教師となつて行つたのち、喜んでその方へ引移つたのだつた。それと同時に彼は同期に卒業した、やはり勝見先生同門の松村といふ友人の周旋で、神田のある私立中學に、英語の教師を勤めることになつてゐた。戀の不安定と共に、彼には生活の不安定があつた。一方作家として立つ上にも、果して世間が迎へてくれるかどうか、甚だ覺束ない地位に在つた。それで彼は節を屈して、糊口の資たる定収入を得るために、可なり忙しいに係らず、月給の少いその中學に、英語の講師として出ることになつたのだつた。そこでは一週十五六時間の授業を持たされた。そして參拾圓の給料を貰ふことに定つた……。

小野はかうして毎日、その下宿の二階から、前庭の柿の木の蟠屈した枝に、日一日濃くなつて行く青芽と、それからずつと見渡される、小石川の高臺まで一帶、黒くごみくした臺の錯綜の中に鮮に綠立つて来る木々を眺めて、苦しい生活を思ひ、惱ましい戀を思つて、何となく果敢ない憂鬱に、心を閉ざれることが多かつた。

さうした或日曜日のことだつた。彼は下の婆さんに依つて、突然客の來訪を報ぜられた。

「小野さん。あの、勝見さんつて仰しやる方と、杉浦さんがおいでになりましたよ。」

「え、勝見さん？ 奥さんかい。」

小野は机の前に、屈託してごろりとなつてゐた身體を、電氣にかゝつたやうに起した。

「え、さうらうござんすよ。四五十の立派な女の方です。」

婆さんは早口に云つた。

「さうかい。ぢやアすぐお通ししてお呉れ。」

かう云つて、小野は慌てたやうに、手早くそこらの散らかりを、二三片付けながらも、どうして今時分、夫人が自身でこんな下宿へ現はれたのかと怪しんだ。吉左右かさうでないか、兎に角、何か事件があるに違ひなかつた。が、併し、杉浦と一緒にといふから、何か不意に思ひ立つて、小野の所へ遊びに來たのかも知れなかつた。兎も角、この客を迎へるためには、餘りに亂雑で汚い二階を、小野は恥かしく思ひながら、夫人を招じ上げなければならなかつた。

「さあどうぞ此方へ。よくこんな所へいらして下さいました。」

小野は夫人の足音が、ぎし／＼と安普請の梯子段へかゝると、入口の所でかう迎へて云つた。

「いゝえ——」

夫人は例の外出をしたときなどの癖で、不機嫌さうな顔をしてゐたが、また決して機嫌がよいのではないらしく、簡單にかう云つて、着てきた黒いコートを室の顔へ脱ぎ棄てた。

杉浦も、すぐ後から上つて來たが、これも會釋し合つたきり、嵐の前の空のやうに、厭に不安を包んだまゝ、何とも云はなかつた。

小野は汚いながら、二つだけある客用の座布團を、取り敢ず薦めて、夫人たちの顔色を伺ふやうに云ひ出した。

「今日はまたどうなすつたんです。わざ／＼こんな陋屋へ？」

座が定まると、夫人は鳥渡杉浦の方を顧みて、そしてまだ不機嫌な面持で答へた。

「今日はね。是から後で上野の畫の展覽會を見に行かうと思つて、杉浦さんを誘つて出かけてきたの

よ。須田さんが二三枚出しておるので、招待状を頂いたから、鳥渡義理にも見に行つて來なくちやならないもんですからね。」

「あゝさうですか。小野はその途中に鳥渡寄つて呉れたのかと思ふと一種の安心と共に、何か例の事件でなかつたことに、落膽を感じて云つた。「そんなら丁度ようござんした。僕もあの展覧會には、ジャンポール・ローランスの遺作が澤山出てゐるさうですから、是非見に行きたいと思つてたところでしたから……。」

併し夫人は、不機嫌な、鳥渡嚴肅な面持を更に緩めはしなかつた。そして改めて、鳥渡、また杉浦を顧み、小野の方に心持を正しく向け直して、かう云ひ出した。

「けれど、今日貴方の處へお寄りしたのは、それとは別に、貴方に少し面白くないことを、お聞かせしようと思つたきたのよ。」

「……はア。」小野はやつぱりさうだつたかと思つた。そして展覧會行の途中と聞いて、少し浮々しかかつた自分の心を叱られたやうに感じて膝を正しながら、暫くして問ひ返した。「どういふことなんですか。」

夫人は杉浦の方を向いて、そして命令するやうに云つた。

「ぢやア杉浦さん。あの、先刻の手紙を出して下さい。」

「はい。」杉浦は大學の制服の、内懐しを探つて、ごく普通の灰色封筒に入れた、一通の書状を取り出した。

「小野さん。この手紙を御覽なさい。かういふ手紙が、今朝家へきたのよ。」

夫人は杉浦から受取つた封書を、突き付けるやうに小野の前へ差置いた。

「はア？」と小野は何の手紙か、何となく胸がどき／＼する程、恐怖をその普通の封筒から受けて、手に取らざるを得なかつた。

表書は字形の小さい、下手な女の筆蹟だつた。それには牛込榎町五十九番地と、ちやんと住所を違ひなく書いてあつて、「勝見兎様」、それから「お嬢様」と並べて書いてあつた。そして裏を返して見ると、無名だつた。

「まア中を讀んで御覽なさい。」

夫人は小野が、封筒を兎見かう見して、躊躇してゐるらしいのを見ると、かうきつぱり促すやうに云つた。

「えい。——」

小野は中に入つてゐる、一枚の紙片を取出した。それは巻紙ではなくて、それも普通に、商店などで使ふやうな、和製の野を引いた、書簡箋一枚へ、表書と同じやうに、小さく、拙いが丁寧に、殆ど全面に亘つて何か書き記されてゐた。

小野は不安に驅られて、急いでその文面を讀み下した。

拜啓。突然見もしらぬ私から、こんな手紙を差上げてまして、失禮の段はどうかお許し下さいませ。私は決して怪しいものではありませんが、此の度、貴家のお嬢さまと小野とが、御結婚なさるとか、いふ噂を聞きまして、名譽ある貴家のために、是非とも申上げなくてはならないことがございます。奥さまは何も御存じがないでせうが、小野といふ人は、是までいろ／＼な女と關係して來た、信用できない不良な男です。前には大學生の時分に、下宿してゐた家の娘に、ちやんとした許婚の男が

外にあるのに、惚れている／＼といひ寄つて、毛蟲のやうに嫌はれて、とう／＼そこに居られなくなりました。それから或る卑しい女優をだまして、待合へ連れ込んだこともありませう。芝居の方の人たちは、あの人があんな汚いニキビ面をしながら、女優とさへ見れば誰でも追つかへ廻すので、藤ではみんなに『佐野治郎左衛門』と云つて、厭がつてをります。そのほか小野のために、欺されて貞操を破られた女は澤山あります。妾もその一人で、小野に欺されて關係のあつたものです。只今では小野は、今の下宿の女中と、關係してゐるさうです。そして小野はさういふ悪い女から受けた恐ろしい病氣をもつてをります。だから何も知らないお嬢さんを、そんな男におやりになつては、ほんとにお嬢さんのために、お可哀さうでなりません。きつと後でひどい目にあはされます。そしてあんな男を家へ入れたら、名譽ある勝見の家に、泥を塗るやうなもんです。あんな男を決して信用してはいけません。お嬢さんを決してあんな男におやりになつてはいけません。呉々も御知らせ申上げます。

×月○○日

勝見奥様
御嬢様

知つてゐる女

小野は讀み進む中に、憤怒とも恥辱ともつかぬ哀情で、顔は赤くなり、胸がわな／＼と慄へる思ひがした。そして明かに自分に對する、多大な悪意を含んだその無名の手紙に向つて、恐怖と狼狽の念から、黙つてたゞもう一度、文面を器械的に繰り返して讀んでゐるきりだつた。

その状をちつと見てゐた夫人は、傍からかう云ひ出した。

「小野さん。貴方こんな女から、そんな手紙を貰ふやうな覺えがあつて？」

「いゝえ、そんなことはありません。」小野は今額を蒼ざめさせて、そして本氣になつて抗議する外なかつた。「こんなことをされる覺えは絶對にありません。是は明かに誰かの中傷です。」

夫人は、落着いた押へつけるやうな調子で、きつと糺問の態度を見せた。

「いゝえ、それは全然嘘ばかりとは云へません。嘘どころか僕のことに関しては、まア確かに幾らか知つてゐる方せう。ずつと前の素人下宿にゐた時分、その若い娘に惚れたことも、確かにそれに違ひありません。が、それもとゞそれだけの話で、別に恨みを受ける覺えもなければ、悪いことをしたといふ程のこともありませんでした。それは杉浦だつて知つてゐます。それから或る新劇の見習ひの女優と浮名を立てられたことのあるのも事實です。が、その女とも決して關係なんぞはありませんでした。僕が佐野治郎左衛門だの何だのと、云はれてゐるのは知りません。が、そんなことは向うで何と言はうと、僕の知つたとちやありません。僕はたゞあゝいふ口善悪ない連中の中に、平氣で入つてゐたのがいけないんです。それから前の下宿の女中とのことなんて、捏造も甚だしいことです。それやア僕だつて、少し位巫山戯たり冗談を言つたりする位のことにはなかつたと云へません。が、僕は絶對に、そんな種類の女を欺したり、悪いことをしたりしたことはありません。僕は金で買った女以外には、一人もそんな女はないのです。それは神に誓つてもよろこびます。だからこんな手紙は、何か僕と冬子さんのことに、妨害を與へようとする者の、事實無根の中傷の手紙です。それに違ひありません。」

小野は熱して、息込みながら辯解した。

「私もさう思ひますがね。併しまたかういふことを云はれてみると、驚いてすぐ杉浦さんの所へ電話をかけて、来て頂いて事實の有無を正したんです。」

夫人はかう云つて、杉浦を顧みたま。杉浦は黙つて、たゞ眉根に皺を寄せたまゝ、澁然と點頭いたきりだつた。

「さうですか。では、もうすつかり杉浦から、事實の有無はお聞きになつたんですね。——杉浦、君は證明してくれるだらう。こんなことは、少くとも僕がこんな女に、妙な関係があつたなんてことは全然嘘だつて。」

「うむ。」杉浦は暗い顔をして點頭いた。「僕の知つてゐる君の過去の事實だけは、すつかり奥さんにお話した。僕として辯解できるだけのことはお話した積りだがね。併し、そんな女との関係の有無に就いては、僕は證明はできないが、君の言を信じる外ないだらうつて云つたとこらだ。それで奥さんは、一緒に君の答を聞きに來られたんですよ。」

「さうか、それは有難う。」小野は杉浦の、少し冷淡めいた態度に、不満を感じながらも感謝した。そして改めて夫人に訊いた。「では、奥さんは杉浦から、僕のことを幾らかお聞きになつたでせうが、僕としても杉浦が申上げた以外に、別に隠し立てをしてゐることも無いとも思ひますし、また是からも決して隠さうとは思ひません。たゞ、併しほんとに是だけは信じて下さい。僕は過去に決して、清淨無垢の男でつたとは嘘にも云へませんが、奥さんやお嬢さんの顔に泥を塗るやうな、そんな不道德なことは決してしなかつたんですから。——」

「え、それは私もさう信じてをりますわ。けれどもこんなことを云はれると、やつぱり氣にはなり

ますからね。でも、貴方がさう仰しやる以上、私貴方のお言葉を信じますわ。——けれどねえ、小野さん。こんな手紙の内容は、もう私も決して信じませんけれどね、こんな手紙を寄越すやうな人があつていふことは十分考へて見なければなりませんよ。こんな卑劣な中傷をしても、貴方のことを邪魔しようつていふのは、餘つ程敵意をもつてゐるんでせうからね。」

夫人は結論を下すやうに、かう云つてくれた。

「さうですね。さう思ふと僕は、情ないやうな怖ろしいやうな氣がします。——女には、そんな女は一人もありませんが、若しかすると前に云つた見習ひ女優が、或ひは僕が幸福になるのを嫉んで、こ

んなことをする氣になつたかも知れませんが、それならそれで、もつと前に、何とか執着がありさうなものですし、また僕の芝居のあつた前後二ヶ月は、お互に文通位はしてゐましたが、それつきりいつとなく絶えて了つて、今ぢや、どこかで畫家の妻君になつてゐるとか聞きましたから、今更僕が近況を聞き知つて、急にそんな氣になることもあるまいと思ひますし、第一冬子さんのことをかう早く聞き知る譯もないと思ひます。ほんとにそこは可怪しいですね。冬子さんと僕とのことは、まあお弟子の連中は略知つてゐるでせうが、その外にはごく狭い範圍のしか知つてゐる筈はないと思ひますからね。どうもその點から考へると、僕は案外近くにそんな中傷者がゐるんぢやなからうかと思ひますよ。第一、僕のことを可なりよく知つてゐますもの。芳川館の女中のことまで、捏造にしろ全然種のないことぢやないんですから、……僕は前に原田君たちの前で、芳川館の話が出たとき、一人綺麗に女中があるつて何氣なく云つたら、それは大寺さんや原田君などのゐた時代からの女中で、その時分はまだ小娘で可愛かつたなんぞと云つてゐましたからね。——まさか先輩たちが反對をした後、こんな手段に出る譯はありませんから、ひよつとすると、原田君ぢやないでせうか。何だかそんなこと

を疑つては濟まないけれど。」

それならば前に述べたやうに、理由がないことはなかつた。ずつと以前鎌倉の一夜、冬子嬢に接吻しようとした位だから、いまだにその心を、彼はもつてゐないとも限らなかつた。そして殊には、最近小野の教へてゐるリダーの誤譯を、ひそかに冬子嬢に向つて指摘した關係もある。……

「さア。夫人は併し首を傾けて、それには同意しなかつた。「私も初めちらと、そんなことを思ひましたけれど、原田さんぢやないでせう。あの人はしたくても、氣が弱いからまさかこんなことはできやしませんよ。」

「それはさうですね。」さう云はれてみると、小野もすぐ原田説は自分で引込めたくもなつた。「そしてまた原田君だとすれば、そんなことを思ひ附いたとしても、第一に嫌疑が自分にかゝるのは知れ切つてゐるから、餘つ程でなければやア、こんなことをする譯はなさうですからね。」

「さうだね。」杉浦もその間、さう言葉を發しなかつたが、適宜なときを選んで合槌を打つた。「鳥渡原田君にはできさうもない藝當だね。——せめてこの手紙の、差出局でもよく解れば、何か手が、りもあるだらうけれど。……」

それには全く故意のやうに、捺印の字が薄れて見えなかつた。時日の數字の方は、可なり底深く彫れてゐる程だつたが、切手の方にかゝつた局名は、どことなく『下谷』の谷の字が讀めるやうな氣がするだけで、殆ど不分明だつた。

「併しそれだつて、別な所へ持つて行つて投函したかも知れないから、全然手がかりにはならないさ。要するにたゞ、僕がこんな敵意をもたれてゐさうな、人たちを疑つて見る外ない譯だね。どうも文面といひ何といひ、男が案を立て、女に書かしたかどうかしに違ひないから。」

小野は猶も辯解めかして云つた。

「誰か貴方が恨みを受けてる人で、そんな風なことをしさうな人はない？」
夫人は訊ね出した。

「さうですね。そんなに恨みを受けてゐる人なんぞ、私には覺えはありませんけれど、反感をもたれてゐるのは、二三無といふ譯ではありません。手紙に芝居の方のことが書いてありますから、或ひは新劇團の連中かとも思はれますが、若しさうだとすると、前に谷本と喧嘩をしたことがありませんか、或ひは彼奴かも知れません。併し彼奴はそんなことをするやうな男ではなし、最近細君を貰つたばかりで、可なり幸福らしいから、僕のことを嫉む餘裕もないと思ふんですけれど。……まアもとは非常に仲がよかつたのに、鳥渡したモデル問題が何かで、喧嘩別れになつてゐるんですから、僕の過去の内情をよく知つてゐて、しかも敵意をもつてゐるとすれば、谷本に第一嫌疑をかけ得られる譯です。」

谷本といふのは、柳井や池田や杉浦と同じく、高等學校の初年級からの友人で、小野と同じく演劇研究が志望であつたため、同級の同志といふ關係上、殆ど行動を共にしてゐた位親しかつたのだが、小野が小説を書き始めた頃に、『奇術師』といふ短篇を書いて、その中に谷本の當時營んでゐた境遇を、モデルに借りたために主人公の性格や何かは、悉く小野自身の氣持を書いたに係らず、谷本は自分を悪く書かれたといふやうに思ひ込み、それが因でいひ合ひをして、鳥渡絶交の形になつてゐたのだつた。

「さう云へばさうだね。君には大分敵意をもつてゐるらしいから。」
杉浦も合槌を打つた。

「もうその人の外には、誰か心當りはない？」

「さうですね。谷本は併し幾ら敵意をもつたところで、そんなことをすると考へられませんが。もつと性格的に云つて、こんな卑劣なことをしさうなのが、外にまだないとも云へません。二三年前一緒に悪い遊びをした仲間で、その後交際はなくなつて了つてから、僕たちが幾らかでも文壇に顔を出しさうになつてゐるのを、快く思つてゐない連中も二三ありますからね。或ひはそんな奴等かも知れません。——が、併しそんな連中を、疑ぐつて詮議する譯にも行きませぬし、詮議したところで、證據が上る譯でもありませんからね。僕はたゞ是からの事實に依つて、證明する外ないんです。」

「ほんとにさうですよ。だから貴方も、是から十分自重して、變なことを云はれないやうにするんだわね。兎に角こんな反對者があるつていふことは、一應考へなければならぬ問題ですからね。こんなことを云はれる間は、たとひ云ふ方がどんな卑劣な人だつたにしても、貴方の望み通りに、早くことを運ぶ譯には行きませぬからね。」

夫人は確りと、戒飭的にいひ進めた。

「さうです、ほんとにさうです。僕もこんな風にまで云はれて、邪魔をされてる間に、假りにも奥さんに對して、そんな要求はできやしません。」小野はすつかり打沈んで、かう言つた後、長大息するやうに附け加へた。「あ、どうしてかう僕は、八方から呪はれてゐるんでせう。」

「ほんとにね。貴方も損な性質ね。——そこは私たちも、同情はして上げてゐるんですよ。先刻もその手紙を叔父さんと一緒に讀んでゐると、後から氣配を察したと見えて、定子がそつと覗き込んでね。貴方の悪口が書いてあるところを少し讀んだんでせう。『あら、お母様、そんな手紙きつとみんな嘘よ。お姉さまもそんなことを、眞實だと信じちやア小野さんが可哀さうだわ。』つて云ふのよ。平常そんな

ことを一度も云つたことのない定子が、そんなことを云ふ位ですもの。貴方は家の方では却つて、この手紙で同情されてゐるんですよ。前には先輩たちのことがあつて、今度はこれでせう。餘り貴方はかり苛められてゐるやうですからね。」

「ほんとに僕のために、お宅へは下らない心配ばかりかけて、誠に申譯もありませぬ。僕も猶よく、自分のことに就いては考へ直してみます。かうして奥さんたちに御迷惑ばかりかけてゐるやうぢやア、私も自分ながら厭になつて了ひます。……」

小野は改めて詫るやうに、夫人の前へ首を垂れた。

「まアそんなに氣落ちをなさらないでもようござんすよ。ですけれど、どつち道その位に考へて下すつた方が、貴方のためにもいゝかもしれませぬ。——ぢやア杉浦さん。此の手紙は先刻のお話のやうに、貴方が預かつてゐて下さい。」と、杉浦に云つた後、小野の方を振り返つて又云ひ足した。「小野さんもそれでいゝでせう。私も持つてゐるのが厭ですからね。」

「え、どうぞ。——」

「ぢやア確かにお預りしました。」

杉浦はその手紙を取上げて、手早く内懐へ藏つた。

「それぢやアこれで話も済みましたから、そろ／＼上野の方へ出かけませうか。小野さん、貴方も支度をなさい。今日は貴方は自家の宿直でせう。だから是から展覽會を見て、その儘すぐ自家へ來ることになさい。こんな手紙が來たからつて、急に遠慮なんぞしなかつてようござんすよ。それとこれとは別ですからね。」

「では、さういふことにいたしませう。」

小野はまだ打洗んだまゝ、さう答へて立上つた。

小野は夫人と杉浦との後について、殆ど不承無承のやうに、上野の白馬會春期展覽會へ赴いた。彼は途々、平常に似合はず、黙り勝つた。餘りに打洗んだ様子が、夫人や杉浦たちに、わざとさうして見せてゐるやうに思はれはしないかと、自身でも氣が付く程、何となく悄氣切つてゐた。併しそれは決して同情をひくために誇張してゐるのでも、又裝うてゐるのでもなかつた。彼は實際、考へれば考へる程、世の中が怖ろしいやうな、呪はれてゐるやうな氣がした。

四面楚歌。——殆どそんな風にすら彼には考へられた。世間は自分の此の位の希望をすら、容れまいとしてゐるのだ。先輩の反對も彼には痛かつた。が、併し又それには、はつきりした理由もあり、又はつきりした對抗の方法もあつた。が、此の無名の手紙に至つては、そんなものは意にかける必要がないと云つて了へばそれ迄だが、又考へやうによつては、恐るべき氣味の悪い、敵意の表現に違ひなかつた。そしてそれは、全く對手が不分明であるだけに、どうすることもできない、不快な焦立を覺えさせられない譯にはいかなかつた。彼はさう考へると、その漠然たる強い敵意に、全く壓倒される程の思ひだつた。考へるだけでも胸が痛くなるやうな氣がした。

「併し、それにしてもあんなことをする奴は、何處の誰だらう。そいつさへ判つたら、何とか又面詰するなり、對抗するなりする方法もあるんだが。——」

彼は齒嚙みをするやうな思ひで考へた。が、併し、自然と反感をもたれてゐるとすれば格別、それほど惡辣な、卑怯な手段に訴へてまで、中傷する程激しい敵意をもつべき男は、どう考へてもそれと

見當の付くべきものもなかつた。

三人は夫人を中央にして、並んで歩いてゐた。杉浦もなぜか黙りこくつて、心持眉根に皺を寄せながら、夫人の向う側を歩いてゐた。その暗いやうな、鬱然たる陰氣を藏した顔を何氣なしにちらと見たあるとき、ふと小野は心の底で、

「あつ！ ひよつとすると是は、杉浦がやつたんぢやないかしら。」

と、閃電のやうに疑つた。そして同じく心の底で慌て、

「馬鹿な！ そんなことがあるものか。」

と打消したが、併しさうした疑念は、先刻夫人から手紙を見せられたときも、ちらりと頭の隅を掠めたのだが、餘りといへば餘りの疑念で、一も二もなく打消したのを、ふと又呼び醒まされたやうに感ぜられた。而して、「馬鹿な！ 杉浦がそんなことをする筈はない。この當の杉浦が！ お前は假りにもそんな風に、自分に同情してゐる親友を、少しでも疑ふなんて、杉浦に對して恥づべきだ！」

と、強く打消しながらも、併しながら又心の奥の奥では、もし杉浦から眞に親友の情誼を除いたなら、誰を措いても一番に、彼が嫌疑を受ける資格を備へてゐるのを、思はない譯にはいかなかつた。

第一、まださう廣く知れ渡つてゐる筈のない、——先輩すらそれと察したに過ぎないところの、——冬子嬢との結婚問題を、知つてゐるのはごく近い人に違ひない。そして第二に、大いに誇張はあるにしても、その種だけは可なり正確に、小野のことに就いて知つてゐるのは、殊に前にゐた素人下宿の娘のことなどを、あれだけに知つてゐる者は、餘程小野に近しかつたものに相違ない。第三に、さういふことを可なり平氣で、底強くやつてのける程度胸のあるのは、まア小野の仲間では杉浦位なものだ。

が、併し杉浦はさうした條件の、殆ど凡てを備へてはゐるが、又それを打消すだけの、打消して餘りあるのみか、疑つては濟まぬと感ぜさせる程の親近を、小野に對してもつてゐる。彼は第一に嫌疑者であつて、しかも第一に非嫌疑者でなければならぬ。

「さうだ、杉浦なんぞであるべき筈はない。もし杉浦だつたら、この世の中は餘りに信ぜられない、怖ろしい世界でなければならぬ。そんなことは有りうべからざることだ。杉浦を疑ふなんて、この世の最後のものを疑ふことだ！」

小野は結局、心の中で、さう自分の疑念を強く叱咤した。そして以後絶対に、そんなことを疑つたりしまいと心を決めた。

……是は後のことであるが、小野は其後十日ほどして、柳井に會つたとき、その未知の中傷狀に就いて、いろ／＼話をした。するとその手紙を出した奴の詮議に及んだとき柳井は、例の清透な三角な眼を、急に光らせるやうにしながら、唇邊に少し皮肉な微笑を浮べて、突込むやうに云つた。

「……それやアひよつとすると、杉浦の悪戯ぢやないか。杉浦なら、平氣でやりさうなことだぜ。彼奴、初めに悪戯半分に、君の舊惡を知らせて困らせてやらう位な考へで、そんな手紙を出させたんだが、反應が餘り眞剣だつたんで、今更打消す譯にもいかなくなつたんぢやないかね。」

「併し悪戯にしちやア、少し念が入り過ぎてゐる。」

「それもさうだね。だが、そんなことア、杉浦のメフィストフレズでもなければやア、やれさうもないことだぜ。いつかも君、僕の蹊手紙を書いて、君を品川までおびき出したぢやないか。」

柳井はさう冗談半分に云つて、そして笑つた。

それは、さう重大なものではなかつたけれど、確かその年の正月頃だつたかに、小野は柳井らし

い文科大學生を使つて、ある病氣の女學生にチューリップを見舞に送る筋の、小説を書いたことがあつた。そしてそれは確かに、柳井のことを少しモデルにしたものだつた。するとそれが發表されて、少しばかり經つたある日、小野は鎌倉の柳井から、激しい抗議の手紙を受取つた。見るとそれには、あの小説を柳井の許婚の人が讀んで、嫉妬を起して家へ告げたため、問題になつて談話が毀れかゝつてゐるから、君からあれが事實でないといふことを、家の人や許婚の人に辯明して貰ひたい、といふことが可なり怒りを以て、——と小野には感ぜられた。書き記されてあつた。小野は驚いて早速それを持つて、杉浦の所へ相談に行つた。と杉浦は飽く迄白くれた平氣な顔で、「それぢアすぐ是から鎌倉へ行つて、詫まつて來るのが一番だ。」と云つて小野に勧めた。そして結局一緒に、小野と鎌倉まで出かけることになつた。小野は全く疑ひもしなかつた。只管柳井のことを心配してゐた。すると品川まで行つたとき、杉浦は急に小野を顧みて、「寒いからもう行くのはよさう。實はあの手紙は、俺が書いたんだよ。」と云ひ出した。小野は嘔然として、怒りもできずに、「ひどいことをしやがるなア。」と苦笑する外なかつた。後で聞くと杉浦は、鎌倉までほんとに連れて行くつもりのところ、餘り風が寒かつたので、中途で自狀したのだつた。——そのときのことを柳井は云ひ出したのだつた。

それでも小野は、まさか柳井の言を、信じる氣にはなれなかつた。

……兎もあれ、小野はさうした思ひに捉はれて、展覽會場まで蹤いて行つた。雨催ひの、薄暗く曇つた日で、殊にはもう閉場間近の遅い午後だつたために、場内は見物人も疎らだつた。天井から落ちる灰白い明りの中に、柔かい影の如く人々は動いて、その靜かな足音が、三和士の上に嚙く反響してゐた。

三人は目録を貰つて、場内を一巡した。批評的に見るには、少し光りが暗過ぎたが、靜かに鑑賞す

るには却つて落着いていゝやうな日だつた。夫人は須田氏の南畫味を加へた裝飾的な畫の前に、暫く立佇つて眺めた。

それから小野が先導で、此の會の元老たちの師なる、先頭物故したジャンポール・ローランスの遺作を陳列した、特別室の方へ入つて行つた。

ローランスの畫は、そのデッサンまで加へると、可なり澤山、意想外に澤山陳べられてあつた。誰の所有か、随分大きな油畫も二三點はあつた。美しい小品も、日本にこんなに出てゐるかと思ふ位、數多くあつた。――さすがにその室に入ると、一種の云ひやうのない藝術的雰圍氣が、彼等の周圍をやんわりと包んだ。

それは大小ともに、純粹に佛蘭西の傳統を帯びた、穩かな古典的な畫だつた。紫つばい陰影を帯びて、滑かに描かれた仄明りに浮ぶ裸體。黄昏のやうに柔かみに満ちた樹蔭。もの靜かな淺綠に匂ふ草原。それを敷いて、あるひは坐し、あるひは寝轉びながら、何事か囁き合ふ婦人。匂やかなる遠近の花弁。――凡ては、晩春のやうな甘い、そして哀愁を帯びた情調に統一されてゐた。

小野はその前に佇立して、暫く眺め入つた。そして平常ならば、寧ろ通俗的とでも云つて誇すであらうところの、甘く、物悲しい紫の陰影の世界を眺めて、急に胸が迫つて來るのを感じた。何だか自分の求めて得られない世界を、此處に描き出されたやうな、『やるせなさ』といふのに近いものを、胸の底に感じたのだつた。彼はそつと滲んでくる涙を堪へて、長く佇んでゐなければならなかつた。彼の心はずつかり弱く、殉情的な氣分に支配されて了つたのである。

「どうだい。つまらないものに、大分感心してゐるぢやないか。」
杉浦が近寄つて來た。

「うむ。甘い。さすがに巨匠だね。」

かう云つて小野は、さりげなくその前を離れた。

「もうそろ／＼出ませうか。」

夫人は二人を顧みるやうにして云つた。

「出ませう。」

小野はそれでも何物かに、慰められたやうな思ひで、展覽會場を出た。

會場を出ると戶外は、もう殆ど夕暮がかつてゐた。山内の瓦斯燈の光りが、黄色く儂なげに點つて、樹下のベンチにゐる人々などは、馴すんで見える程だつた。山下へ出ると、急に開けた廣小路の街に、燈火は漂ひ残つた夕明りと争つて、急がしく瞬きを始めてゐた。……

小野の心は、いやが上にも殉情的になつてゐた。そしていつの間にか彼の心は、弱く、悲觀的に傾いてゐた。かう、先輩や見えざる敵の、可なり激しい反對があつては、到底駄目だ。……そんな風な考へが、途々いつとなく、彼の心の中に起つてきた。

「何處かで御飯を喰べて行きませうか。」

「さうですね。」

「何處にませう。」

「此處にはどうも適當な家はありませぬね。」

「ぢやアもう少し下町の方へ行きませう。」

そんな風な話を、夫人と杉浦とがしてゐるのを聞いても、小野は敢て口を挟まなかつた。彼自身の勝手な考へで云へば、一刻も早く夫人と二人きりになつて、自分の胸の中を聞いて貰ひたいやうな

淡い焦慮に囚はれてゐた。

三

日本橋の方のある鳥料理で、三人一緒に夕飯を認めた後、廣尾の川瀬家へ歸る杉浦と別れて、小野と夫人とが牛込の勝見家へ歸つてきたときは、もう疾うに宵の口は過ぎてゐた。

家の中は静かだつた。子供たちは日曜で、まだ何處かへ遊びに行つてゐるのか、それとも離室の方へ行つてゐるのか、又は恐らく末の男の子どもたちは、寢に就いて了つたのであらう、母屋の茶の間には唯、柳町に住んでゐる先生の兄の長三氏と、冬子嬢だけが留守を守つてゐた。冬子嬢は例に依つて、女中と一緒に母夫人と小野とを玄關に迎へた。

「あら、いらつしやい。今まで御一緒だつたの。」

さう彼女に云はれたとき、小野はさすがに嬉しさを禁じ得なかつたが、それと共に何となく胸が詰つたやうに感じて、

「えい。」としか答へることができなかつた。長三氏は、宿直の小野が來たので、挨拶を済ますとやがて、自分の家の方へ歸つて行つた。

冬子嬢は何か裁縫のやうなものを、再び膝の前に披げかゝつてゐたが、小野の方を鳥渡見て、微笑みかけながら云つた。

「貴方も今日展覽會へ行らしたの。」

「えい。一緒に行きました。なか／＼綺麗でしたよ、ローランスといふ人の畫が。」
小野も、そんな風に對手になつて、他意なく答へてゐた。

「さう？ それから何處へいらしたの。」

「それから夕飯を喰べに、『扇家』といふ所へ行きました。」

「さう？ お母さまと何處で一緒におなりになつたの。」

冬子嬢は少し首を傾けて此方を窺いた。

「少しお話があつたので、僕の下宿へ寄つてくださつたんです。」それから小野は勇を鼓して、此方から訊ねる氣になつた。「貴女も御存知でせう。今朝何處かから、僕のこと就いて、妙な申傷の手紙が來たのを。」

「えい、何だかそんな手紙が來たらしいのは、知つてゐますけれど、何んなことが書いてあるのか、私に知らせんわ。讀まなかつたんですもの。——讀まない方がいゝつて、お母さまが仰しやいましたから。それに私、そんなもの讀みたくもありませんわ。」

「さうですか。なに、下らない嘘が書いてあるんですから、その方が勿論いゝんです。けれども、僕のために貴女までいろ／＼御迷惑をかけて、ほんとに濟みませんね。」

小野は感謝と詫びとを合せて云つた。

「いえ、そんなことありませんわ。」

「いえ、ほんとに濟みません。だから僕も、何とか今の中に考へ直さうと思つてゐるんですけれど、

僕はその人を起して、そんなことを云ふべきでないよ、小野はその位で目を噤んだ。冬子嬢の方でさうかうしてゐる中に、居間の方から、夫人は平常着に着換へて、太つたゆつたりした身體を現は

ますからね。できるならさうして下さい。そして自重して、氣永に勉強して、時機を待つてゐて下さい。下されば、先輩たちの反感も解ける時があるでせうし、世間の誤解もなくなくて、きつと貴方の望み通りに、物事が成つてゆくと思ひますよ。ですからできるならさうして下さい。私の方でもお願ひしますわ。」

夫人もさすがにさう云ひながら、感激したらしく眼をしばたゝいた。

「えい、さうします。奥さんがさう云つてくだされば、僕だつて心丈夫に思つて、一生懸命に諦めます。辛いけれど諦めます。……」

小野は抑へようとしても溢れ出る涙を、今は押し止めることもできず、下を向いて言葉を途断らした。

「……………」

夫人も下を向いて端坐してゐた。

と、その時、次の間のピアノを置いてある邊りで、かたりと蓋を落すやうな音がした。微かだが、それと共に衣擦れの音がした。

「誰れ？」夫人は耳聴く聞きつけて聲をかけた。「冬子かい？」

隣室からは何の返事もなかつた。夫人は小野の方を見廻した。

小野は暫くして、何の返事も無いのを見てとると、本能的のやうに素早く、座から立ち上つた。そして立つて行つて、客間と隣室との間に、壁掛けのやうに掛けた露西亞更紗の垂れ布を、つと排して隣室を窺つた。

と向うの室隅の眞つ黒いピアノを置いてある所に、冬子嬢は彈奏椅子に腰をかけたまゝ、蓋をした

鍵盤の上に、斜に身を投げかけ、重ねたやうに置いた兩手の中へ顔を埋めて、突つ伏してゐた。

小野は驚いて近寄つた。

「どうしたんです、冬子さん。」

近寄つて見ると、彼女はピアノの上の上に泣き伏してゐるのだつた。まだ肩を取つたばかりの、さう廣くない肩を、時々くく〜と揺り上げ、光りする蓋の上に、惜しげもなく押しつけた前髪を、細かに波打たせてゐるのだつた。――彼女は小野の間に、一二度頭を振るやうにした。

「ほんどにどうなすつたんです。どうかなすつたんですか。」

事態は殆ど明白に察せられたに係らず、小野は猶もこんな風に訊かなければならなかつた。

「いえ、何でもないので。」

冬子嬢はやつと、伏せた顔の下からさう云ふと、椅子からふいに立上つて、今度は向うの反對の隅の、衣桁の置いてある所へ行つた。そして兩手を顔に當てたまゝ、立つたまゝで壁に身を凭せるやうに、やはり嘔り泣きを止めなかつた。

小野も仕方なしに、思ひ切つて圓々しく、その後を追つて行つた。そして肩に手を掛けるやうにして、その横顔を窺き込んだ。

「何か今の僕たちの話をお聞きになつたんですか。」

「えい。彼女は大きく點頭した。」

「……………」彼女はそのとき、薄光の中で、涙に濡れて黒ずんだ眼を、初めてちらと小野に與へた後、

また目を伏せて涙に途断れ〜かう云ひ出した。
 「でも、私、折角貴方が好きになつたのに、……好きになつたばかりなのに、……そんなことになるなんて。……」

さう言つて彼女はまた両手で顔を蔽うた。

小野はさう言はれると、嬉しさと哀しさとに思はずもつと近々と、顔を寄せるやうにして云つた。

「有難う、……それはよく解りました。けれどもまあそんな所に泣いてゐないで、お母さまの所へおいでなさい。……僕だつて、どんなに悲しいか解らないんです。……泣きたいのは僕の方なんです。……」

「冬子。どうしたんだえ。」

母夫人の聲が、後に聞えた。夫人も心配して、客間から立つて来て、冬子嬢の方へ近寄つて來たのだつた。小野は少し冬子嬢から、氣まり悪げに遠のいて、道を開けるやうにした。

「お母様。」

冬子嬢は母を見ると、低いが、更に訴へるやうな叫び聲を上げて、その方に身を寄せて云つた。

「だつて、お母さまがあゝ仰しやつて下さつたもんですから、私、小野さんを好きにならうと思つて、折角好きになつたばかりだつたのに、又、そんなことになるなんて、私厭ですわ。……厭ですわ。そんなに早く思ひ切つたり、私できやしませんわ。だつて折角好きになつたところなんですもの。」

「あゝいゝよ、いゝよ。」夫人は娘を擁へるやうにして、慰める外なかつた。「小野さんだつて決して是つきりお前を思ひ切つて云ふんぢやないんだからね。さう迄お前がお思ひなら、今まで通りでもいゝんだよ。決して心配したり、泣いたりすることはないんだよ。だからこんな所に泣いてゐたりし

ないで、床をとつてもうお休みなさい。定子さんたちにそんな泣顔を見られでもすると、不思議に思つて嘸はれますよ。彼方へ行つて直しておいでなさい。」

さう云はれると冬子嬢は、まだ両手を顔に當てたまゝ、併し少し恥かしげに、その部屋を出て行つた。

「ほんとに仕方がない子だね。」

夫人はその後、姿を見送つて、そんな風なことを呟いたが、また改めて小野を顧みた。

「でも、ほんとにあゝ思つてゐるんでせうから、貴方もその積りでゐてくださる外仕方がないでせうね。」

「どうも困りましたけれど、冬子さんがさう思つてゐてくださったことは、僕は何よりも嬉しいです。それだけでも満足です。」

小野は思ひがけない結果に、感激して云つた。

「まあ此方へおいでなさい。」夫人は再び小野を客間の方へ落着くやうに、勧めながら云ふのだつた。

「兎に角、貴方はその積りで、自重して時機を待つて下さるんだわね。是で冬子の心も解つたんですから猶更ね。」

「えゝ、さうします。……」

結果は、かうして思ひがけない喜びを小野に生んだ。そしてこの第二の妨害も、却つて彼には幸福を齎した以外、何の効めもなしに済んだ。そのことに就いては、小野は天に感謝しても足りないやうな思ひだつた。

併し、その中傷狀の差出人は、結局そのすつと後まで、永久に何處の誰だか、まるで推測だけで

分らないで了つた。

「五日経つた後で杉浦は、小野に會つた時から云つた。

「あの後で冬子さんのとつた態度を、僕は奥さんから聞いたよ。あのために君は却つて幸福になつたらしいぢやないか。冬子さんはまたあんな手紙を見たくもないつて云つたさうだね。僕はそれを聞いて感心したよ。」

彼はそれつきり、その手紙のことに就いては、何事も云はなかつた。確かに彼が保管して置いた筈だが、その後どうしたか分らない。

また後で聞いたところに依ると、それと殆ど同じ文面の手紙が、米田氏の家へ配達されたさうだ。その封筒には米田氏と共に、佐々木重吉氏にも宛てあつたが、佐々木重様とだけで、吉の字が無かつたといふ話だつた。それなぞも疑へばいろ／＼疑へる資料にはなつたが、結局何の證據にもならなかつた。先輩たちはそれを受取ると、夫人に見せようと思つたが、一度あゝした反對をした後でまたそんな手紙を鬼の首でも取つたやうに見せることは、却つて執拗いと思つたので、たゞ笑ひ話にしただけだつた。が、先輩たちは或點まで、眞實それが小野の關係した女から、來たものだと思つてゐる人もあるとの話だつた。

兎もあれ、小野は當時その手紙の生んでくれた幸福に、すつと満悦してゐたのだつた。たゞその時の冬子嬢の態度を、後に柳井に話したところ、彼は例に依つて澄んだ冷やかな眼を上げ、心も眉をひそめて言つた。

「さうかい。それはまあ君にとつては幸福だつたね。けれども、僕に云はせると、決してケチを付ける譯ぢやないが、どうも冬子さんつていふ人は、無意識かどうか知らないが、芝居氣が多過ぎるやう

だね。——勿論こんなことを云つたつて、君は僕の言葉を承認しやしまいが、どうも一種のコケツトぢやないかね。さうしてさういふところは僕なら好かんね。」

勿論、小野はそんな柳井の言などを、不服でこそあれ、採り上げはしなかつた。そして冬子嬢のあの時の態度に感謝こそすれ、決してそんな疑念などを挟む餘裕はなかつた。

第十一章

それから二三ヶ月の間は、小野にとつて、最も幸福なる時機ともいふべきものであつた。意外の反對は、また却つて意外の好結果を小野に齎した。小野ももうその夜から、殆ど冬子嬢の内諾を得たと同じやうな、許された状態になつた。

弟子たちが男つ氣のない勝見家へ、宿直する制度はまだ廢されなかつた。そして小野はその宿直の番を、日曜日の夜にもつてゐた。

彼は日曜になるのを待ちかねて、早くから牛込の勝見家へ出かけて行つた。その外の日にも遊びに行つたが、公然と殆ど一人で、夫人や冬子嬢と親しく話し得る日曜日の夜は、彼にとつて地上の天國のやうな思ひだつた。

その頃小野は、神田の或る中學校に講師を務めてゐた。そして安い報酬に係らず、忙しい多くの時間を持たされてゐた。で、日曜日は殊に、彼にとつて楽しい日だつた。そして天抵お晝頃から勝見家